第三節　主なる作者と作品

當代の淨瑠璃作者としては、竹本座には大近松の門から出た文耕堂・竹田出雲を初めとして、長谷川千四・三好松洛以下淺田可啓・竹田小出雲・小川半平・中邑閏助などもあり、文三郎も亦吉田冠子の號を以て筆を執り、[註] 次期の大立物近松半二も名を連ね始めて居る。是に對して東の豐竹座は、西澤一風の門から出た並木宗助・安田蛙文が中心となつて働き、爲永太郎兵衞も見遁し難き重要の位置を占めて居り、以上三人の配下に淺田一鳥・安田蛙桂・浪岡鯨兒・並木丈助・豐竹應律・黑藏主・難波三藏・三津飲子・中村阿契等があり、又、豐竹越前少掾も梁塵軒と號して筆を取つた事は前に略記した通りである。

かく作者として名を丸本に載せて居る者は、東西を通じて二十餘人の多數に及んで居るが、その中注目すべきは西の竹本座では文耕堂・長谷川千四・竹田出雲であり、東では並木宗輔に爲永太郎兵衞である。今それら主要作者の作品について概觀を下さう。

〔註〕吉田冠子連名作品。

戀女房染分手綱　寶暦元年二月
名筆傾城鑑　〃　二年三月
伊達錦五十四郡　〃　二年十一月
受護若名歌勝閧　〃　三年五月
菖蒲前操弦　〃　四年二月
小袖組貫練門平　〃　四年四月
小野道風青柳硯　〃　四年十月
崇德院讃岐傳記　〃　六年二月
平惟茂凱陣紅葉　〃　六年十月
姫小松子日の遊　〃　七年二月
薩摩歌妓鑑　〃　七年九月
蛭小島武勇問答　〃　八年八月

(1) 文耕堂

當代の西の作者としては文耕堂が最も先輩である。文耕堂は本姓名を松田和吉といつた。その最初の作は正德三年正月竹本座上場の『河內國姥火』である。併しその後續いて作品を出さ

ず、只僅に享保七年九月、『佛御前扇車』を出し、また翌年二月出雲との合作、近松の添削なる『大塔宮曦鎧』を出したのみで、享保十五年迄は作つて居ない。彼が作者としての眞の活動は享保十五年から寛保元年迄の十二年間に過ぎない。思ふに近松在世時代は、竹本座では彼は立作者として立つ餘地はなかつたので、近松の下に雌伏して助手として働いて居たものかも知れない。併し不思議な事は、文耕堂は海音・出雲・千柳と共に淨瑠璃作者四天王と呼ばれ、また筋立頓作の名人といはれた才物であつたに拘らず、享保八年の『曦鎧』に出雲と合作で名を連ねて居るのみで（それも再板には削られてゐる）、出雲の世を去る享保十四年迄の七年間、彼の作者生活としては最も活動すべき時代に全く作品を絶つて居ることである。何か座本出雲との間に衝突でもあつたのではなからうか。然るに出雲の歿した翌年の享保十五年二月、千四との合作『三浦大助紅梅靮』を出してから引續いて作品を出した。その作品を示せば次の通りである。

河内國姥火	正德三年正月	
佛御前扇車	享保七年九月	
大塔宮曦鎧	享保八年二月	出雲と合作、近松添削

（以上作名松田和吉）

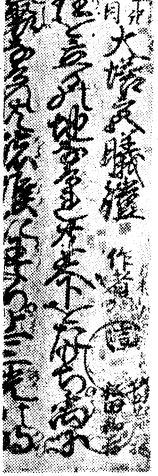
三浦大助紅梅靮　享保十五年二月　千四と合作
信州姨捨山　同年八月　同
須磨都源平躑躅　同年十一月　同
鬼一法眼三略巻　享保十六年九月　同
増補用明天皇職人鑑　享保十七年四月　同
壇浦兜軍記　同年五月　同
車返合戦櫻
元日金年越
享保十八年十一月
應神天皇八白幡（やつのしらはた）　同年十一月
甲賀三郎窟物語　享保十九年二月
赤松圓心綠陣幕　享保廿年九月　出雲と合作
敵討襤褸錦（つゞれのにしき）　元文元年二月　松洛と合作
猿丸太夫鹿巻毫（しかのまきふで）　同年五月　同
御所櫻堀川夜討　同年十月　同
元文二年正月　同

行平磯馴松	元文三年正月	松洛・正藏と合作
小栗判官車街道	同年八月	千前軒と合作
ひらがな盛衰記	元文四年四月	千前軒・松洛・小出雲・可啓と合作
今川本領猫魔館（ねとまたやかた）	同　五年四月	同
將門冠合戰	同　五年七月	同
伊豆院宣源氏鏡	寛保元年正月	同
新うすゆき物語	寛保元年五月	松洛・小川半平・小出雲と合作（以上廿四篇）

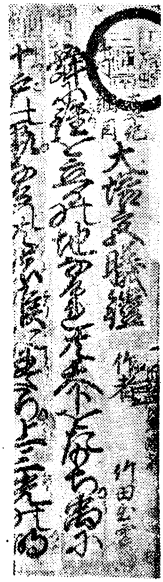
以上の如くで寛保元年五月の『新薄雪物語』以後はその名が見えない。正德三年、『姥火』を作つた年を假りに三十歳とすれば、この年は五十八歳に當るが、この時限り隱退または死去したものと想像される。生涯の作品廿四篇中、自分だけの作は五篇に過ぎない。その他の十九篇中、前期のものには長谷川千四との合作が五、後期では三好松洛との合作が最も多く、そしてそれ等に佳作が含まれて居る。尤も合作である以上は是等を以て全く彼の作とするのは穩當でないかも知れないが、千四は彼一人の作や出雲との作に於ては、この文耕堂との合作程に筋の複雜にして山の鮮かな作を見せて居ないし、松洛は二枚目の作者であるから、これ等の諸作を

以て文耕堂の作として取扱つても差支なからう。

以上文耕堂の作品廿四篇中でその處女作たる『河内國姥火』は、周防の大内家のお家騒動に、河内國姥が火の傳說を取合せて脚色したものであるが、作柄が散漫であつて決して佳作とは言ひ難い。が、次の『佛御前扇車』はそれより九年を經て居る上に、近松の添削して居る爲でもあらうか、餘程作は進んで居る。材題を『平家物語』に取り、殊に妓王・妓女の事の章を本として技巧をこらしたもので、清盛の寵を得た佛は、實は澁谷昌俊が父の仇を報じ、源氏の名刀小烏丸の太刀を奪還する手段として、白拍子となつて清盛に近侍させて機會を狙つて居る昌俊の妻延壽であつたが、延壽は舅の敵が自分の實父である事を知り、夫を手引してその手にかかつて父の罪を償はうとする場面を全篇の山として、これに宗盛が小督の局を手に入れようとする放恣の振舞、長谷部信連の義烈の働、小松内府の情理ある取り裁き等を取合せたもので、三段目の切、佛身代りの場は頗る技巧に富んで居る。それで大阪の嵐三右衞門座では同じ享保七年十一月『新御殿相生小松』と改題して上場した程であつた。而してこの翌年作つた



「大塔宮曦鎧」（初版）卷首



「大塔宮曦鎧」（再版）巻首

『大塔宮曦鎧』の名作たることは言ふ迄もない。尤もこれも近松の添削である上に、竹田出雲との合作であるのみならず、再版の正本には作者として出雲の名のみが載せられて居るので、普通出雲の作で通つてゐるが、やはり初版の正本の作者名の示す通り松田和吉が中心の作と見て差支へないと思ふ。再版に至つて彼の名が削られたのは、或はこの作の『つはもの萬歳』の詞章を取つて『智略の萬歳』といふ印刷物にして時の人々が弄んだのを、同年六月十一日に禁止されたので、(註) その飛沫を受けて彼も作者の名を掲げる事を遠慮しなければならなかつたといふやうな裏面の事情が伏在して居たのではなからうか。

〔註〕享保八年六月十一日の觸。

町々にて大塔宮曦鎧、智略の萬歳と申す繪圖用候義、無用に可仕候旨被仰付候、此旨町内銘々へ可被申聞候已上。

（月堂見聞集）

智略の萬歳

德若に御萬歳と、御代も榮えましまさず、是はきやうがる有樣や、土岐立ちかへるあした迄、みつ〳〵ばなし、氣質をさぐり尋ねんと、思ふはめでたうさぶらひける、昔の京はなんばの京、中頃は奈良の京、今の京と申す

は、よろづよこしまで、我まゝ働く平の京、京のしおきは關東任せ、宮がたひづめ公家衆たをし、百姓せたげ、町人いじり、民は又ぎつちりく、誠に無念にさふらひけると問ひかくる。

徳川幕府が上は朝廷を蔑にし、下は庶民を虐げて、京都に暴威を振つたのを諷したのである。

『曦鎧』は頗る長篇の五段物であるが、太平記に材を取つて、大塔宮が關東を滅す盟主となられ、無禮講に事寄せて窃に勤王の將士を召した。その有力な味方の一人と數へられた土岐頼員の妻は、その父なる六波羅の武士齋藤太郎左衞門を味方に引入れようとして却つて謀計が露顯し、官軍は敗れて、宮は一時大和十津川の郷士戸野兵衞の許に潜まれたが、程なく勤王の士が蜂起して六波羅を滅すといふ筋であつて、齋藤が義の爲に骨肉を殺す二段目の陣太鼓と、三段目の身代り音頭の場とが最も勝れた場面で、齋藤は近松の『吉野都女楠』の小山田前司型の古老の武士で、時代物に表れる剛骨頑强なる武士氣質を示す代表的の人物であり、大義親を滅すといふ武士の理想が最も劇的に描かれてゐるので名高い。さればこの作は後に操に於て屢ゝ繰返されたのみでなく、歌舞伎に於ても、本曲初演の翌享保九年正月大阪中座に於て、又同十一年末佐野川座に於て演じられて以來、三都の劇壇に於て屢ゝ繰返されて今日に及んでゐる。場割を示すと次の通りである。

初段
- 大序—紫宸殿の段
- 中—土橋の段
- 切
  - 無禮講
  - つはもの萬歳
  - 段切、六波羅の犬高橋最期

二段目
- 口—陣太鼓
- 中—馬揃へ
- 切—松原合戰

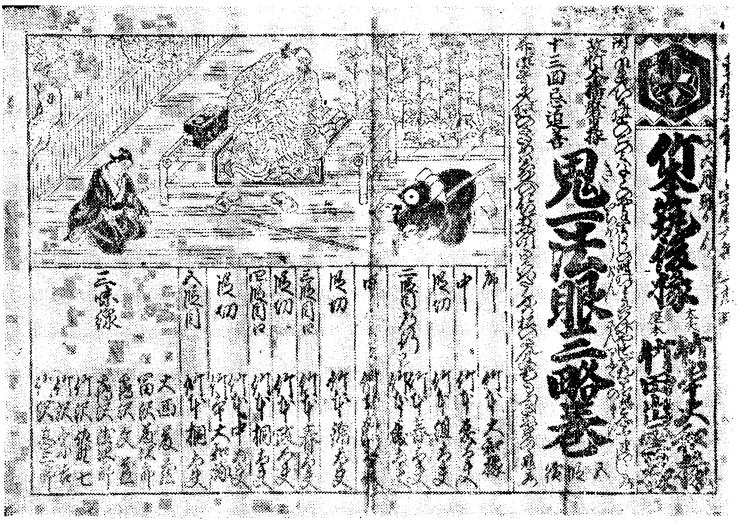
三段目
- 口—切子の段
- 中—若宮短冊
- 切—身替音頭

四段目
- 道行—熊野すゞかけ、
- 口—義光錦旗奪還
- 中—物狂
- 次—兵衛館
- 切—藤棚

五段目—齋藤の最後

『曦鎧』から八年目の享保十二年に、文耕堂の名で初めて長谷川千四と合作した、『三浦大助紅梅靮』も亦名高いものの一つである。この作は源頼朝が石橋山に敗れて再擧を圖るに方つて、三浦大助義明の一族が率先してその味方となつた。畠山重忠・梶原景時も内々頼朝に心を寄せ、平家の命を受けて表面三浦の本城衣笠城を攻撃するやうに見せて、義明を助けて源氏に屬し、大庭兄弟を滅すといふのを骨としてあるが、二段目の切又九郎内の場から三段目の切の二つ胴の場が最も技巧的の場面であつて、殊に三段目切は『石切梶原』の原作である。次の『信州姨捨山』は太平記種で瓜生兄弟が脇屋義治を奉じて活動する顚末を脚色したもので、文耕堂の作としては名高いものではないが、第二段目の切に瓜生保の母岩橋が足利高經の名代として義治の首實檢に里見左近の邸へ赴く條は、『鳥目上使』(註一)の原據として注目すべき技巧である。

これに對して『須磨都源平躑躅』は源平盛衰記種であつて、一の谷前後の敦盛・忠度・熊谷・六彌太の關係を主として想を構へたものであるが、第三段に九州緒方兄弟の事、第五段に重衡最後の樣を特敍した爲、作全體としては破綻を示して居るが、第二段の切が有名な『扇屋熊谷』の原作であるので名高い。次に出た『鬼一法眼三略卷』は判官物の一種で、第一・第二段


竹本筑後掾
竹本摂津大掾
竹本摂津掾
竹本摂津掾
竹本摂津

が景清と瓜二つの容貌なのを利用して、景清の身代りにならうとする第二段の辻講釋小家の場は、後の『二人景清』の依つて生れる元となり、第四段の根の井の普請場の屋上立廻りは『八犬傳』芳流閣の屋根仕合の原據をなす。『車還合戰櫻』は太平記種であつて、その第四段目大森彦七佯狂の場は、今日行はれる歌舞伎の『大森彦七』の原據となつたものと考へられる趣向である。『元日金年越』はいふ迄もなく『椀久末松山』の改作であるが、椀久に亂酒の惡癖あるに乘ずる番頭嘉左衞門の奸惡、椀久出入某藩藏屋敷の出納役の公金私消事件、椀久の女房おさんと松本とは異母姉妹たる因緣等を取合せて技巧を弄したる爲に、原作に見るやうな世話淨瑠璃の味は薄らいで了つたのは惜むべく、『應神天皇八白幡』に至つては此作者としては珍らしく世界を大時代に取つたが失敗に終り、又、『甲賀三郎窟物語』も同樣の結果に終り、次の『赤松圓心綠陣幕』は又々太平記種となつた技巧を弄したが、矢張り佳作とは評し難い。併し次の作たる非人の敵討を材題とした『敵討襤褸錦』は、啻に彼の作中屈指の佳作であるのみではなく、後に簇出する敵討物淨瑠璃の原型を示したもので、この點から見れば戲曲史上頗る注目すべき作といはねばならぬ。尤も非人敵討は文耕堂の創案でないことは言ふ迄もなく、既に遠く寛文四年に大阪の役者福井彌五彌左衞門が『非人敵討』(註)を二番續に脚色し、門弟荒木與次兵衞をし

て之を演じさせて好評を博し、また享保期の名優姉川新四郎は屢々この非人敵討を演じて名聲を擧げた。のみならず、有名な大晏寺堤の場の非人春藤次郎右衞門が竹杖に仕込んだ青江下坂を示しての思入れやセリフも、既に是等の俳優によつて工夫を凝らされてゐる。それらを文耕堂は利用したのであるが、この『敵討檻樓錦』が演ぜられるに及んで、操のみならず、歌舞伎も亦從來の作を捨ててこの作を轉用することになり、今尙、舞臺に生命を有するのである。

（註）『役者論語』の『佐渡島日記』に、「非人敵討の狂言は、中古姉川新四郎此仕内を始めて仕出せしやうに若き人は思へども、昔荒木與二兵衞といへる立役仕始たり、其時の姿は病かづらにて隨分くろ〳〵と油をつけ、顔のつくりも白粉濃くぬり美しく、衣裳は白小袖無地、大廣袖紅絹うら、花色の丸ぐけ帶を前に結び、手足も隨分白くして出立せられし由、これ予が親傳八話にて聞傳へたり（中略）。姉川非人の仕打も古へとは甚だ野卑なり、試し物に來りし加村宇多右衞がせりふに、敵討といふは命惜しさにいふと、散々せめかける時、竹に仕込みし刀を拔き差つけ、青江下坂二つ胴に敷腕ずんどよう切れます、へゝゝゝと笑ふ、荒木氏始めてせられしは、青江下坂二つ胴に敷腕といひ聞かせ、差付けたる刀を兩手に持ちながら、左の方へ引寄せ、調子低く、ずんどよう切れますへゝゝゝと會釋する、此善惡は後の藝者考へ見るべし。」

『猿丸太夫鹿卷毫』は、猿丸太夫が二荒山中に蟄居して鹿の音に聞きとれての假睡の夢に、己が前半生の道鏡時代の横暴の振舞や、自分が立派な身分であり乍ら民間に捨てられた不思議の

因緣譚等を復現するといふのであつて、近松の『一心五戒魂』の翻案かと思はれるやうな凝つた趣向であるが、やはり大時代の材題であつた爲か失敗の作と評するより外はないが、判官物の一種である『御所櫻堀川夜討』は人口に膾炙された名作で、第二段切・骨繼の段、第三段切・辨慶上使の段、第四段切・藤彌太物語等いづれも名高いものである。同じく源平時代を世界とした『ひらがな盛衰記』の價値については、今更繰返す迄もなく、逆櫓の段や無間の鐘は殆んど國民的のものとなつてゐるし、『新うすゆき物語』は中卷園部邸相腹の段によつて世に知られ、いづれも文耕堂の名作として數へられるものである。その他『行平磯馴松』や『小栗判官車街道』や『今川本領猫魔館』の如きも歴史的には相當に意義ある作であるが、今は舞臺にその跡を絶つて居るだけであつて、本質的には稍劣るものといつて差支ない。

之を要するに文耕堂の淨瑠璃は、その材題上から見れば『源平盛衰記』及び『太平記』を元としたものが非常に多くして、彼の代表作ともいふべきものは多くはこの中にあると共に、また今日に於ては、舞臺に生命を有する作の大多數も亦これ等である事は頗る注目すべき點であつて、近松を初めとしてその他の作者に見るを得ざる特例で、これがこの作者の一特徴であると言ひ得る。思ふにこれは、『源平盛衰記』や『太平記』が次第に廣く讀まれて、その中に武士

道の體現を見、國民性の一面を探り得た當代の民衆を本位とした時代精神の反映であつたと共に、國民性に根ざす永久性が根柢に横たはる我が國戯曲の時代物、特に史劇の特質を具へて居るが爲に、斯くまで生命を保つ事が出來るのではなからうか。而してその主想は言ふ迄もなく忠義の爲に身を捧げ骨肉同胞を犧牲とするといふ武士道的精神と、これに對する人情の葛藤とであつた。すると文耕堂は戯曲史上戰記物を材題とした史劇作者として最も成功した一人であつたと言ひ得られる。

併し材題が國民的であつただけではなくして、趣向の立て方がまた頗る勝れて居て、一般の見物の興味を惹き、感情を興奮させるやうに技巧が凝らされて居たのも、舞臺藝術として生命を保ち得た一の有力な原因であつたことは言ふ迄もない。彼が献身・犧牲といふ武士道的精神體現の爲に好んで用ゐた趣向は、身代りであつた。彼は實にその作品廿四篇中七篇迄も身代りの趣向を用ゐてゐる。卽ち『扇車』の三段目切の、佛御前が父に代つて命を捨てる事、『曦鎧』の身代り音頭、『姥捨山』第二段目の、里見主税が脇屋義治に代る事、『須磨都』の二段目、扇屋桂子が敦盛に代る事、『車還』の三段目で、小夏が鄙宮（大塔宮の若宮）に代る趣向、『綠陣幕』の初段で、村上義光が大塔宮の身代りに立つ事、『堀川夜討』の三段目で、信夫が卿の君の身代り

に立つ事等がそれで、『薄雪物語』の幸崎伊賀守・園部兵衞の相腹に至つては、身代りの一層技巧的になつたものに過ぎない。そして身代りと連關して首實檢の上使にも非常に技巧をこらした。卽ち齋藤太郎左衞門の如き、辨慶の如き、この適例で、彼等は義の爲に骨肉を敢て殺す苦しい緊張した場面を描いて、觀客の心を動かさうとして成功してゐる。また文耕堂は假面の人物（田樂屋が藤彌太・山伏が本間入道）、佯狂（大藏卿、彥七）、佯不具（島目、狂）等を用ゐ、或は『石切梶原』、『身代り音頭』、『綠の陣幕』の第一段の加古川宿で、赤松範貞と弟則祐とが矢を射合（註二）ふといふやうなきはどい手に汗を握らせるやうな趣向を好んで用ゐて、場面を緊張させ觀客の興味を惹き、また作中の人物に複雜な血緣をからませて、筋の複雜さと事件の意外の展開とを圖つてゐる等、技巧を弄した作が多い。この傾向は既に近松の晩年の時代物などにも現れて居たが、文耕堂はこれを受けて一層極端にしたものと見ることが出來る。これがやがて人形劇全盛時代の淨瑠璃の一大特徵であつたと同時に、我が國戲曲史上に於ての、所謂舊劇なるものの趣向の立て方の最も顯著な一特質となつてゐるのであつて、文耕堂は確かにその一代表作者であつたと言ひ得る。描かれた人物としては類型の嫌はあるが、義に强い武士氣質の性格を示す方面に於て、相應に成功して居るといつてよいと思ふ。

（註一）默阿彌の『一谷凱歌小謠曲』元治元年八月市村座上場、のち『意中繼忠義繪』と改題。新宮光家は、木曾殿の息女笹鶴姫の爲に、身代りたらんと先を爭ふ姉妹の松ヶ枝紅梅のうち、繪合で紅梅を身代りと定める。實檢の上使根井正親、實は紅梅の親といふ趣向。

（註二）近松の『蛙合戰』の七草四郎と葛西清治との射合ふ矢の間に手塚幡樂が飛入る趣向の翻案。

（2）長谷川千四

千四は文耕堂とほぼ同時代の竹本座の作者の一人であつた。大和の人で、始め長谷寺の僧侶であつたが還俗して淨瑠璃作者となつた。淨瑠璃の處女作は享保十二年正月竹本座上演の、『鼎軍談』の切として出した『敵討御未刻太鼓』である。これは所謂御堂前敵討を仕組んだので、好評であつた。時に三十九歳である。それから引續いて次の諸作を出して居る。

加賀國篠原合戰	享保十三年五月　出雲と合作
尼御臺由井濱出	享保十四年二月　同　右
眉間尺象貢	同　年八月　同　右
京土產名所井筒	同　年十一月
三浦大輔紅梅鞠	享保十五年二月　以下六曲文耕堂と合作

信州姥捨山　享保十五年八月
須磨都源平躑躅　同　年十一月
鬼一法眼三略卷　享保十六年九月
增補用明天皇職人鑑　享保十七年四月
壇浦兜軍記　享保十七年九月

この中千四だけの作は前の『未刻太鼓』と『京土產名所井筒』のみで、前表の初めの三篇は竹田出雲との合作、後半の六篇は文耕堂との合作といふことになつてゐる。然るに『壇浦兜軍記』を作つた年に、彼は人形遣吉田文三郎及び彦太夫時代より四段目語りの名手で、當時竹本座の人氣を負つてゐた竹本大和太夫と相謀つて竹本座を退いて、別に人形芝居の櫓を擧げようと企てた（倒冠雜誌）。併しこれは不成功に終つたが、千四は爲に竹本座を退き、その翌享保十八年四月廿日に四十五歳を以て歿した。油煙齋貞柳の狂歌集『家づと』に、『寂光の都は行きて歸らねば、土產に作る淨瑠璃もなし」といふのが載つてゐるが、これは『京土產名所井筒』で名を取つた千四の死を悼んだものである。椎本才磨の門人であつた關係上、貞柳などとも交遊があつたのであらう。

斯の如く千四が淨瑠璃作者として活動したのは、三十九歳から四十四歳までの前後六年の短日月で、作品も僅に十一篇に過ぎず、しかも合作が多いから、いはば未成品であり、自然淨瑠璃史上左まで注目すべき作者とは言ひ得ないが、『未刻太鼓』及『名所井筒』は共に佳作であつて、彼に未來のあつた事を示して居る。『未刻太鼓』は貞享四年五月、德島の藩士磯貝兵右衞門及びその子藤助の伯父で、しかも養父である磯貝實右衞門の敵島川太兵衞を、大阪久寶寺町の御堂の前で討つた事件を脚色したもので、複雜な戀愛關係を巧に扱つてここに作の動機を設けて居る。卽ち實右衞門の養子藤助は、許嫁の實右衞門の娘お雪を袖にして召使のおさごと通じ、お雪は草履取の友藏と通じて懷姙してゐる、これを島川太兵衞が知らずに妻女にと强要し、一方太兵衞の奴八内はおさごに懸想して居る（そして友藏は、實は宇和島の舟越九太夫の子九八郎といふ者で、勘當されて奴奉公をして居たのだが、父の重病により勘當を許されて迎へに母が來たので、國へ歸つて許嫁の女と結婚せねばならぬが、さうなれば姙娠したお雪を捨てる事となるので、驅落しようとするのを八内に妨げられて事件が暴露する）。そして友藏とお雪の關係が暴露して二人が勘當された爲に、太兵衞は面目をつぶした怨みに實右衞門を殺して遂電し、藤助と兵右衞門とは敵の跡を追ふ、そして勘當されたお雪と友藏が大阪で髮結床をして生活して居ることが動機で關係者が落合ひ、

敵の所在も明かになつて首尾よく本望をとげるといふ風に運んで居る。人物相互の關係は稍〻小細工に流れ過ぎ、また太兵衞が實右衞門を殺す場面も多少不自然であるやうに思はれ、太兵衞が三十兩を御堂へ納めるのも、彼の性格を打こはす事となつて面白くないなどの缺點もあるが、大體に於て人物に無駄がなく、筋がさらさらと運ばれ、文章も流暢であつて、作者に才氣ある事を示してゐる。因にこれを改作して小菊・半兵衞の情事を取合せたものが、安永七年正月北堀江座興行の『御堂前菖蒲帷子』（菅專助・若竹笛躬等作）であるが、原作に劣る。

次に『京土產名所井筒』は古今彥三の巷說を材題としたもので、播磨の福島侯の家臣彥坂左膳が奧女中絹江と相契つたが、奧方のお供をして有馬へ湯治中、讐敵仇浪濱右衞門に陷れられて共に勘當され、相携へて近江の左膳の實母の許に身を寄せ、義兄黑木屋惣八賣子となつて柴賣となり、彥三古今と稱へたが、ここでも亦仇浪の爲に侮辱せられたのが原因で、京に出て古今は舞子に、彥三は廻しとなつたが、古今は筒井屋重三といふ者に身請される事となり、二人は身の不運を歎いたが、彥三の義兄惣八が前には仇浪を斬り、今又重三を切つて身に咎を引受けて自害し、二人は歸參を許されるといふ筋で、後世の古今彥惣の原作として注目すべき作品である。

此二篇は材題にもよる事であらうが、他の合作物に見るやうな徒に筋の複雜を圖り、山を設けて技巧を弄するといふ弊がなくて、少い人物をよく働かせて、比較的筋を自然に運ばせて居るのが特徴で、彼にかすに更に十年廿年の年齡を以てして此方面に發展させたら、或は立派な作を殘したかも知れなかつたらうと思はれる。加之、彼の著作年表を見るに出雲との合作三篇はいづれも惡作であるが、文耕堂との合作には非常に名作が多く、しかも文耕堂としても千四との合作が比較的量から言つても質から見ても名作に富む點から考へて、松洛や出雲よりは遙かに千四とは息が合つて居たことを示し、ここにも千四の手腕を十分に認めることが出來ると思ふ。この意味に於て千四も亦此時代の作者としては見逃すべからざる一人となるのである。

(3) 竹田出雲

人形劇全盛時代の竹本座の座本として、又淨瑠璃作者として多くの名作にその名を留めた竹田出雲は最も注目すべき一人である。出雲名は清定、幼名三四郎、千前軒と號し、初代出雲掾清一(一に清直)の子である。寶永二年竹本座の座本となり、近松門左衞門を座附作者に聘し、人形の衣裳を美にし、道具立を華々しくするなど大いに操芝居の興行法を改め、又、近松に師

事して享保年中から淨瑠璃を作り、寶曆六年十月廿一日六十六歳を以て歿したといふのが、今日まで傳へられる彼の略傳である。

併しこれには頗る疑問がある。第一に竹本座の座本となつた出雲が清定であるかといふ點である。寶曆六年六十六歳で歿した清定は元祿四年の生れで、問題の寶永二年に漸く十三歳である。十五歳の若年で出雲掾と掾號を名乘るのも受取れぬのみならず、よしや竹田芝居といふ金力の背景があつたとしても、十五歳の若輩者が當時五十四歳の筑後掾と、五十二歳の近松の二大藝術家を召抱へるべく說伏したとは、常識上からも肯定し得ない事ではないか。自然、此時の出雲は後に近江と稱へた清定の父に當る出雲ではなかつたかとの想像が起きて來る。近江は享保十四年閏九月に八十一歳で歿したのであるから、この時は五十七歳である。年配から見ても正にこの人でなければならぬ事であるのは、西澤一鳳の『脚色餘錄』に「享保年中に忰に出雲の名を讓る」とあり、また『名人忌辰錄』に「享保十一年五月に近江と改めた」とあるので明かで、人形劇史上重大事件の一つであつた竹本座が買收、興行法改新を斷行したのは、清定の父の出雲であつたと斷定してよいと思ふ。序にこの人の傳記について一言して置き度い。『歌舞伎事始』・『聲曲類纂』等によれば、此人はもと阿波の人で次郎兵衞といひ、江戸に住み初め

て砂時計を作る工夫をし、更に之を應用して操人形を製作して傀儡師となり、京都に上つて人形を御所に献上して口宣を頂戴して竹田出雲掾と稱へた。これは萬治元年十二月の事であるが、寛文二年大阪道頓堀の濱側に芝居を建て、河水を利用して種々珍奇な機巧人形を働かせて世俗の嗜好に投じ、竹田の水からくりは價が安くて面白いといふので、繁昌して富を成したといふ。併しこの芝居の創立者と、竹本座の座本となつた出雲卽ち後に近江となつた人とを同人であるとすれば、口宣を頂戴した時に十一歳といふ矛盾を來すので、少くとも二代目の出雲と見なければならぬ事となる。

かういふ次第であつて、竹田出雲の家系に關しては從來の說は信を措き難く、少くともこの主題となる出雲掾淸定は三代目と見なければならぬ。

然らば淸定はいつから出雲と名乘つて父近江の跡を受けて竹本座の座本となり、又、作者をも兼ねたのか、これにも亦頗る疑はしい點がある。この點について考へる爲に、先づ竹田出雲の名のある淨瑠璃を年代的に左に列擧して、それについて一應の檢討を加へる必要がある。

外題	興行年月	合作者
大塔宮曦鎧	享保八年二月	松田和吉、近松添作

櫻町昔名花（お吉空月）	享保八年十一月	（正本未見）
諸葛孔明鼎軍談	同　九年七月	
右大將鎌倉軍記	同　九年十一月	
出世握虎稚物語（やつこ・をさな）	同　十年五月	
大内裏大友眞鳥	同　十年九月	
伊勢平氏年々鑑	同　十一年九月	
七小町	同　十二年四月	
三莊太夫五人嬢（おうすめ）	同　十二年八月	
工藤左衞門富士日記	同　十三年三月	
加賀國篠原合戰	同　十三年五月	長谷川千四
尼御臺由井濱出	同　十四年六月	同
眉間尺象貢	同　十四年八月	同
蘆屋道滿大内鑑	同　十九年十月	
甲賀三郎窟（いはや）物語	同　廿年九月	文耕堂

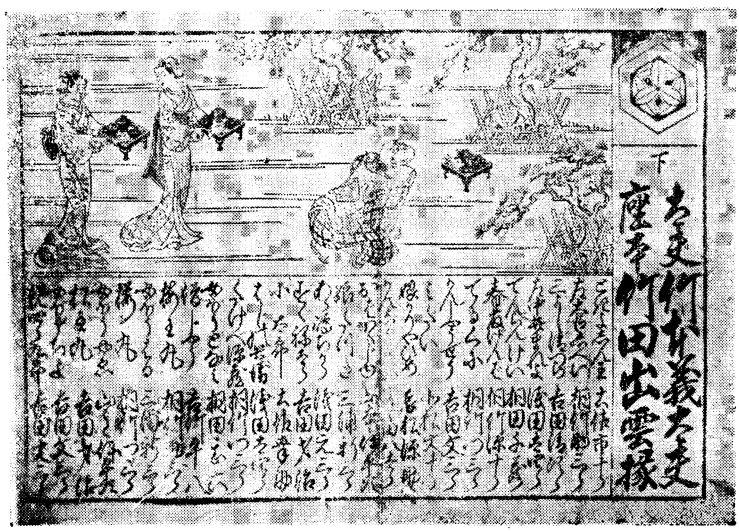
小栗判官車街道	元文三年八月	同	
ひらがな盛衰記	同　四年二月	文耕堂・松洛・可啓・小出雲	
今川本領猫魔館	同　五年四月	同	
將門冠合戰	同　五年七月	同	
伊豆院宣源氏鑑	寛保元年正月	同	
男作五雁金	同　二年七月		
入鹿大臣皇都諍（みやこあらそひ）	同　三年四月		
兒源氏道中軍記	延享元年三月	松洛・小出雲	
菅原傳授手習鑑	同　三年八月	並木千柳・松洛・小出雲	
傾城枕軍談	同　四年八月	並木千柳・松洛	
義經千本櫻	同　四年十一月	同	
假名手本忠臣藏	寛延元年八月	同	
粟島譜嫁入雛形	同　二年四月	同	
双蝶々曲輪日記	同　二年七月	同	

菖蒲前操弦　寶暦四年二月　冠子・閨助半二・松洛
小袖組貫練門平　同　四年四月　同
小野道風青柳硯　同　年十月　同
崇德院讃岐傳記　同　六年二月　同
平惟茂凱陣紅葉　同　年十月　同右・景鯉

以上三十四篇を以て出雲及び出雲と他の作者との合作として數へ、殊に出雲を以て立作者と見、これを全部出雲によつて代表させて來たのが從來の習はしであつた。すると出雲は三十三歳の時から作者をも兼ねたもので、出雲と名乘つて竹本座の座本となつたのはこれより前であつたといふ事になる。すれば、父の出雲が享保十一年五月に近江と改めたといふ説には矛盾する事となるが、これは『脚色餘錄』の記事を善意に解すれば救へる

附番「菅原傳授手習鑑」

としても、前の著作年表中、竹田近江が歿した年から後五年間出雲の作がバッタリ絶えて居て前に言つたやうに文耕堂と千四との合作が上場されて居る事は頗る不思議で、考へやうによつては、享保十四年の『眉間尺』より前の十三篇に出てゐる出雲の名は、座本たる出雲が代表的に署名したのではなからうかとの疑問さへ起るが、それは兎も角として、並木千柳との合作『菅原』、『千本櫻』、『忠臣藏』等の名作を除けば、作の多い割合には勝れたものは極めて少數であつて、劇作者としての手腕は文耕堂や千四よりは劣つて居たやうに考へなければならぬ結論を生んで來る。若し出雲に千柳及び文耕堂との合作が無かつたとすれば、作者としての出雲



同　右

の價値は低下するが、皮肉にも文耕堂や千柳には、出雲との合作以外に名作が澤山あるのを見れば、出雲の眞の手腕はいよいよ怪しくなる。自然、出雲は今日まで作者としては過當に評價されてゐたと斷定されても仕方がないことになる。

〔編者註〕出雲問題について疑問を提出したのは、實に著者が最初である。その後、鈴本行三氏が『竹田出雲と其一家』（『國語と國文學』十三ノ十二）で、これを解明された。結論を表にすると次の通りである。

竹本座座本二代（出雲二代）（出雲三代）
竹田出雲（外記）―竹田出雲（千前軒）
竹田芝居初代　出雲初代
○竹田近江清房（竹田出雲）―竹田芝居二代　同三代
竹田近江清孝―竹田近江清英……

併し乍ら出雲一人の作中にも相當に世に知られたものがあり、そのうち最も注目すべきは『蘆屋道滿大内鑑』である。これは葛の葉の傳說の戲曲化されたものの中で最も有名な作であるが、この詩材の源は遠く平安時代に求むべきであつて、彼の『日本靈異記』や『水鏡』に見えてゐる狐が人妻となつて子を生むといふ古傳說に、『大鏡』や『今昔物語集』や『宇治大納言物語』などに見えて居る式神を使つたといふ安倍晴明の傳說を取合せて、晴明の母を神通力ある狐として、その人の傳へる陰陽道の方術を神聖にしようとした說話に基づくもので、その完成されたものは『簠簋抄』（正保四年刊）所傳の、晴明の母は狐で「戀しくば」の歌を殘して姿を消し

た事、晴明・道滿行力爭ひの事、晴明鳥の鳴き聲を聞き分ける事、一條戻橋の傳說等であつて、これを題材として劇化を試みたのである。古く說經にも『信太妻』はあるが、その原型のいつ頃完成されたかは今正確な史料の徵すべきなきを以て姑く措き、戲曲のみについていへば、延寶六年二月刊行の天下一相模掾吉勝（延寶五年十二月山本角太夫受領の結果としての稱呼）正本の『信太妻』が原作であつて、一方歌舞伎の方面でも元祿期には信太妻の上場を見たが、淨瑠璃では紀海音の『信田森女占』が件の作についで出たもので、更にこれ等の諸作の外に近松の『百合若大臣野守鏡』の第三段目、玄海島の子別れの場面などをも藍本として作り上げたものが、卽ち『蘆屋道滿大內鑑』で、結構の大きく、首尾相整ひ、人物のよく按排されてしかもそれぞれ活動して居るのみならず、全篇の頂點を示す四段目、子別れの場に於て恍惚・夢幻の人形劇の特色を十分に發揮した手腕は推稱するに足ると思ふ。

〔編者註〕『葛の葉』戲曲の系統については、『近世演劇考說』又は『近松以後』參照。

同じく古傳說に材を取つた大きな系統をなす淨瑠璃の一種として、彼の作中注目すべきは『三莊太夫五人孃』である。山椒太夫の人買事件を仕組んだものとしては說經の『さんせう太夫』を原據として、淨瑠璃には山本角太夫の『都志王丸』、岡本文彌の『山椒太夫』、伊藤出羽

掾の『山桝太夫』（山本河内掾作）等があり、是等の諸作のあとを受けて紀海音の『山桝太夫戀慕湊』、（寶永五年十月）が出で、更に山桝太夫に茨木屋幸齋をモデルとして『山桝太夫葭原雀』（享保五年九月、海音作）が作られ、更に轉じてこの『三莊太夫五人孃』となつたもので、後の近松半二の『由良湊千軒長者』の原作をなすものとして注目すべきである。

又、『大内裏大友眞鳥』も出雲の作中、技巧を弄したるものの代表作として注目すべき淨瑠璃である。これは井上播磨掾の正本『大友眞鳥』を本とした、竹本義太夫の正本『大友眞鳥』の改作であつて、作中の人物の關係の複雜なる事は、出雲の作中でも稀に見るところで、人形劇全盛時代の技巧派作品の一代表作である。この作は九州の探題大友眞鳥が反逆を企てたので、時に在京中の筑紫の大名高村兼道が討伐を命ぜられた。然るに兼道の下着に先立つてその父雅道は眞鳥の捕虜となつた。妻の雲井は之を救ひ出さうとして、兼道と雙生兒の間柄で瓜二つの容貌である百姓助八を身代りに立てて首を打つて眞鳥に渡し、兼道は助八に扮して機を待つといふ趣向を立て、しかも雲井は眞鳥の妹で、兼道とは叔姪の間柄であるのみならず、作中の重要人物たる眞鳥の臣金藤太夫婦と、兼道の臣龜山藏八夫婦とは、重緣の兄弟姉妹といふ複雜な關係を構へて、義に依つて骨肉同胞相分れて戰ふといふ仕組にしたものである。

次に『男作五雁金』も亦著名な作として擧ぐべきである。これは元祿十五年刑死の大阪の五人男の巷說に、岩崎權六の情事を取合せて脚色したもので、俠客物の一つとして注目すべき作柄である。今この淨瑠璃の系統について簡單にいへば、元祿五年八月十六日（『傳奇作書』續の中）に、雁金文七等五人の無賴漢が千日の刑場に於て梟首されたのを（養笠雨談、浪花五俠傳、實事譚）、同年九月九日初日で『雁金文七秋の霜』と題して岡本文彌座にかけた。短篇の世話物であるが、これが雁金文七の戲曲の原作である。この後加賀掾は『難波五人男』を、又竹本座でも雁金文七の淨瑠璃を上場したと『南水漫遊』にあるが、正本を見ない。一方、歌舞伎に於ても、道頓堀の松本名左衞門座で文七に染川十郎兵衞、淸川に荻野澤之丞が扮したといふ風に、劇界に種を與へた事件であつた。而してその翌年山本飛驒掾座の『雁金文七一周忌』が作られ、又下つては宇治加賀掾の正本『雁金文七三年忌』が出るといふ工合に、度々蒸し返

「文七一周忌」見返し

されたものであつたが、この系統を受けて、岩崎權六の情事を取合せて作られたのが卽ち『五雁金』で、五人男の戲曲としては最も著名な作品である。

〔編者註〕『雁金文七』戲曲の系統については、『近世演劇考說』又は『近松以後』參照。

(4) 並木宗輔

以上竹本座の主要なる作者に對して、この時代の豐竹座の作者として擧ぐべきは並木宗輔である。宗輔は啻に豐竹座の作者として、舞臺的效果に富む作品を提供して同座の基礎を固め、竹本座に對抗して人氣を湧かせて、人形劇隆盛の機運を催すに與つて功があつたのみでなく、竹本座の爲にも幾篇かの傑作を作り、結局、同時代に於ける最も代表的の作者として認めらるべき人である。大阪の生れで、通稱松屋宗助、市中庵と號した。初め俳諧を學んだが、のち西澤一風の門に入つて淨瑠璃作者となり、享保十一年四月八日より豐竹座上場の『北條時賴記』を西澤一風・安田蛙文とで合作したのが其の處女作で、時に三十歲である。

これより先、豐竹座は享保八年七月紀海音が『傾城無間鐘』に淨瑠璃の筆を絕つて以後は、西澤一風・田中千柳合作の名義で、新作が上場されたが、事實上は千柳一人の作に係つたもの

のやうである。彼の作については前にもいつたが、合作者として名を連ねた一風自身によつて皮肉な批評を加へられたやうに、兎角不當りのみであつたので、享保十年に豐竹座の作者を辭して上京後、同座は作者難に陷り、ここに窮餘の作として同座の元老西澤一風が中心となつて想を構へ、並木宗助・安田蛙文らをして作り上げさせたのが『北條時賴記』で、享保十一年の四月八日から勾欄にかけ、五段目雲の段・女鉢の木の趣向を豐竹上野少掾・豐竹和泉太夫・野澤喜八郎の出語りに、藤井小八郎・近本九八郎・中村彦三郎の出遣にしたところが大當りで、翌年閏正月末迄引續いて興行し、ここに豐竹座の基礎は定まつたのである。この作は本質的に見ては決して佳作とは評し難いが、近松の『最明寺殿百人上蘆』を巧に翻案して、『女鉢木』の趣向を立てたる點に興味の中心があつたのと、丁度この前後に竹本座も作者にこれといふ人もなく、竹田出雲の名によつての平凡な作が引續き上場されて居たに過ぎなかつた爲に、見物の興味を引いたものと思はれるが、これは一風の考巧な構想によつたであらうが、前後の事情に見て宗助の作劇上の手腕が發揮された結果と見るを至當とすべきであらう。これによつて宗助は豐竹座の作者として立つ事となり、その後は一風の名は作者としては見えずして、すべて宗助と蛙文との合作物が上場される事となつた。今それを年表的に示せば次のやうになる。

外題	興行年月	合作者
北條時賴記	享保十一年四月	一風・蛙文
清和源氏十五段	同　十二年二月	蛙文
攝津國長柄人柱	同　年八月	同
尊氏將軍二代鑑	同　十三年二月	同
南都十三鐘	同　年五月	同
後三年奥州軍記	同　十四年正月	同
藤原秀郷俵系圖	同　年九月	同
蒲冠者藤戸合戰	同　十五年正月	同
本朝檀特山	同　年五月	同
楠正成軍法實錄	同　年八月	同
源家七代集	同　十六年正月	同
和泉國浮名溜池	同　年四月	同
赤澤山伊東傳記	同　年十月	同

待賢門夜軍　享保十七年九月　同

忠臣金短冊　同　年十月　小川文助・蛙文

莠伶人吾妻雛形（ふたばれいじん）　同　十八年七月　並木文助

那須與市西海硯　同　十九年八月　同

南蠻鐵後藤目貫　同　廿　年二月

萬屋助六二代褶（かみこ）　同　年五月　同

刈萱桑門筑紫轢（どうしんつくしのいへづと）　同　年八月　同

和田合戰女舞鶴　元文元年三月

安倍宗任松浦簪　同　二年正月

釜淵雙級巴（ふたつどもえ）　同　年七月

丹生山田青海劍　同　三年四月

茜染野中の隱井　同　年十月

奥州秀衡有髯壻　同　四年二月

狹夜衣鴛鴦劍翅　同　年八月十五日

鷓山姫捨松　同　五年二月

この後暫く宗輔の名は、豐竹座の作者としては見えずして爲永太郎兵衛が代り、翌年寛保元年冬、豐竹越前少掾等と共に江戸の豐前座に下り、翌年三月爲永太郎兵衛との合作『石橋山鎧襲』を上場し、又一方、大阪の豐竹座に於ても太郎兵衛及淺田一鳥合作の名義で、三月から『百合若高麗軍記』が上場されて居るが、これは前後の事情が明かでない。その後、豐竹座の爲に『道成寺現在鱗』を淺田一鳥と合作で、八月十一日から豐竹座に上場して居るが、それから又暫く、豐竹座は爲永太郎兵衛の作が上場されて、宗輔の名は見えない事となるが、それから三年目になつて、宗輔は並木千柳と名乗つて竹本座の作者として現れる事となる。この間の事情は明かではないが、一方に豐竹座内に於て爲永太郎兵衛が競爭者として現れた折柄でもあり、竹本座は、千四も文耕堂も世を去つて、作者難に陷つて居た場合であつたので、座本の出雲に聘せられたのを機會に竹本座に轉じたものかと考へられる。而して並木千柳の名の下に竹本座の爲に作つた作は次の通りである。

外題	興行年月	合作者
軍法富士見西行	延享二年二月	小川半平・竹田小出雲

夏祭浪花鑑　同　年七月　松洛・小出雲
楠昔噺　同　三年正月　同
菅原傳授手習鑑　同　年八月　出雲・松洛・小出雲
傾城枕軍談　同　四年八月　出雲・松洛
義經千本櫻　同　年十一月　同
假名手本忠臣藏　寛延元年八月　同
粟島譜嫁入雛形　同　二年四月　同
双蝶々曲輪日記　同　年七月同　同
日蓮記兒硯　同　年十月　近松原作
源平布引瀧　同　年十一月　松洛
文武世繼梅　同三年十一月　松洛

卽ち前後六年間竹本座にあつて、十一篇を出雲・松洛等と共に合作したのであるが、この時代の作が淨瑠璃としては最も世に歡迎され、又、人形芝居の黃金時代を現出した時であつた。これには千柳の力の與つて大なる事は言ふ迄もないのである。而して竹本座を去つた翌年の寶

曆元年十月には、豐竹座上演の『日蓮聖人御法海』の添削をなし、また『一谷嫩軍記』の三段目迄を作つて、この年五十七歳で世を去つた。但し宗輔の歿年に關しては、『聲曲類纂』は寛延二年九月、『名人忌辰錄』は寛延三年九月七日としてあるが、作品の著作年代上から見れば、濱松歌國の『劇場年鑑』の寶曆元年說が最も矛盾が無いと思ふ。初め彼は作者名も通稱の宗助をその儘用ゐて居たが、享保廿年から宗輔と改めた。並木と名乘る作者系統の祖であつて、その門下からは寶曆期の歌舞伎の名作者並木正三を初めとして、並木交輔・永助・良輔等の淨瑠璃作者を出し、又、彼の別號千柳（千柳としては二世）は丈輔の弟子翁助によつて繼がれた。

宗輔は眞の意味に於ける合作を、初めて大膽に行ふべく主張した人で、又その實行者であつた。依田學海の『並木宗輔傳』に、このことについて次のやうに言つてゐる。

……宗輔時在豐竹座、謂一人之智巧有限、極力爲之、無以越人、非聚衆智藉衆力、不足以盡人情矣、乃與同儕謀、分一篇爲數齣、各作一齣、然後宜刪刪之、宜增增之、貫穿聯合、鎔鑄融液、字鍊句琢、描情極態、使觀聽者遭其可泣則放聲大哭、遭其可笑則捧腹絕倒、於是宗輔氏合作之名大著（新評戲曲十種）

自然、彼の作は此時代の他の諸作と同じく合作の長所を極端に示して居るものが多い。本來

有機的なるべき一篇の戯曲に於ては、理想としては、合作の許さるべき筈のものではないが、舞臺上の技巧と、實演者の技倆とが進んで、作劇上の手腕が之に及ばない場合に、實演上の自然の要求に餘儀なくされて起る變態的の現象で、人形劇に於ては寶暦期より明和・安永と降るに從つてこの弊害はいよいよ甚しくなつた。その缺點としては作に統一がなくなり、徒に技巧を玩ぶ事となり、作意が支離滅裂に陷り易くなるのは免れ難い事である。彼の作も亦如上の缺陷を伴ふものが少くないが、又一面に於ては、我が國戯曲の特徴を最も豐富に有つてゐる作も尠くなく、殊にそれが詩材や劇詩としての本質的價値に於てよりも、寧ろ形式に於て、舞臺技巧に於てこれを見るものが多い。彼の作の注目すべきものとして擧ぐべきは、

忠臣金短冊

南蠻鐵後藤目貫

刈萱桑門筑紫轢

和田合戰女舞鶴

釜淵雙級巴

鷓山姫捨松

夏祭浪花鑑
楠昔噺
菅原傳授手習鑑
義經千本櫻
假名手本忠臣藏
双蝶々曲輪日記
日蓮記兒硯（日蓮聖人御法海）
源平布引瀧
一谷嫩軍記

等である。今、此等の諸作について簡單にその作の大要と價値とを述べて見よう。

『忠臣金短冊』は數ある赤穗義士復讐の戯曲中、前を承けて後を開く位置に立つ作として注目すべきものである上、此系統中の最大傑作たる『忠臣藏』も亦彼の關係した、否な重要な作者として働いた作であるが故に、今茲に便宜上、赤穗義士の戯曲の系統について極めて簡單に說明を試みようと思ふ。元祿十四年三月淺野長矩・吉良吉央刄傷、十五年年十二月四十七士の復

讐、十六年二月四日義士一同切腹といふ元祿泰平の惰眠を覺した快擧は、劇作者の見遁すべからざる好材題であつた事は言ふ迄もない。果然この事件を最初に取入れたのは、事件落着後僅か十二日を經た元祿十六年二月十六日から、江戸の中村座で興行された『曙曾我夜討』であつた。世界を曾我に取り、中村七三郎の曾我十郎と宮崎傳吉の曾我五郎で、曾我の復讐に假托して吉良家討入を演じたが、僅々三日にして其筋から興行を禁止された。次に此事件を取扱つた戲曲は、これより四年後に出た近松翁の『碁盤太平記』である。此淨瑠璃は『兼好法師物見車』(寶永三年五月)の跡追として出したもので、兩篇を通じて大きく三段組織となつて居る。『兼好法師物見車』は近松壯年時代の作『つれ〴〵草』の改作であつて、世界を吉野朝時代に取り、鄉の宮に對する高師直の道ならぬ戀を轉換させる爲に、吉田の兼好のすすめによつて鄉の宮の侍女侍從をして鹽谷高貞の室かほよの美貌を說かせる、師直は侍從にこの道ならぬ戀の取持を强要し、侍從が實行しないのを怒つて其首を討ち、且又、高貞を滅してかほよを奪はうとする。侍從の父又五郎は娘の非業の死を悲んで發狂し、『徒然草』起稿中の兼好の庵室に來て、高貞の室が家老八幡六郎に助けられて避難したのに落合ふ、又五郎は兼好の法力で恢復し、追跡して來た師直の侍大將小林民部を八幡と共に討つといふ迄で終つて居る。このあとに六月一日から跡追と

して『碁盤太平記』を出した。高貞の家老八幡六郎は大星由良之介と改名し、一子力彌と共に山科に閑居し、深く韜晦して窃かに同志と氣脈を通じ、復讐の機を待ち、いよいよ機熟して父子東下しようとする、由良之助の母と妻とは自刄して二人を激勵する、大星は下着して同志と共に復讐の素懷をとげ、師直の首を光明寺の亡君の墓前に手向けて一同切腹する。前の『物見車』との間には深い關係を認め難いといふ人もあるが、「鹽冶殿浪人、初めの名は八幡六郎、今は大星由良之介」といふ句を以て兩者に連絡をつけてあるが、露骨にしてないのは江戸の禁止の先例に鑑み、初めから興行政策上切離して、萬一の時には前だけは助けようとの計畫に基づいたものと見る方が穩當である。この作の眼目は勿論山科閑居の場で、足輕寺岡平右衞門の最期と、別れの場との二つの山を設けて、ここに大星由良之介の非凡の性格と、貞烈な武家の女性と健氣な足輕平右衞門とを活動させて、引締つた、また力の籠つた場面を構成してゐる。今日尙舞臺生命のあるのも尤と思はれる。

『碁盤太平記』より四年目の寶永七年六月十日から、大阪の篠塚庄松座で吾妻三八作の『鬼鹿毛武藏鐙』を上場し、大岸官内に篠塚次郎左衞門、山下萬菊の力彌が大當りで、九月十一日まで百廿日間興行した。それ故、大阪の岩井座も枡山座も此狂言を出し、京都の夷屋座では『太

平記さゞれ石』の外題で、判官―仁左衛門、許嫁出雲の前―山下かるも、家老大岸宮内―山下京右衛門（此詳しい役割は『脚色餘録』三の中）であつた。その後日として『硝（さざれいし）後太平記』小寺吉右衛門―仁左衛門、出雲の前―かるも、鎌田惣右衛門―澤村長十郎、大岸―京右衛門といふ役割。萬太夫座では宮内に小佐川十右衛門といふ次第で、京阪共に義士仇討の芝居が大流行を極めた。この歌舞伎の刺戟を受けて、更にその筋を操に逆輸入して作つたのが、海音の『鬼鹿毛無佐志鐙』である。正德三年十一月に豐竹座に上場された。前の三八の『鬼鹿毛武藏鐙』を操風に仕立てたものと思はれる。世界を小栗横山に取り、小栗判官が岳父横山左衛門の强慾專擅を憤つて管領の殿中で刄傷に及び小栗は切腹を命ぜられ、領地を沒收された、遺臣大岸宮内が同士四十六士と語らひ横山父子の首級をあげるといふ筋で、

第一段　刄傷の場、小栗館、照手との別離、切腹。
第二段　照手姫道行、藤澤寺の場（梶右衛門加盟）。
第三段　片桐源左衛門浪宅の場、源吾の別離。
第四段　伏見撞木町の場、揚卷身請、刺殺。
第五段　敵討。

といふ風に場面が分れて居るが、この中の第三段と第四段とが最も注目すべき場面であることは言ふ迄もない。

さて此跡を受けて出たのが『忠臣金短冊』である。並木宗輔と小川文助・安田蛙文との合作で、享保十七年十月朔日から豐竹座の勾欄にかかつたものである。尤も『外題年鑑』には享保十八年十月一日とあるが、これは錯誤であることは、『忠臣金短冊繪盡』の序文の年號附がこれを證明して居る。世界を小栗横山に取り、大體の系統からいへば海音の『無佐志鐙』のあとを承けたものであるが、近松の『碁盤太平記』の山科閑居の場をも巧に取入れて戯化に富んだ一篇として纒め上げて居る。

第一段　政知御殿の場、香木の爭、
　濱御殿勅使饗應―刄傷の場、切腹、門外の場、大驚傳吾の大荒事

第二段　大津松本の足輕寺澤七右衞門佗住居の場
　横山邸の段―草履取ちく內目見え（寺澤）魚賣善助、妻うた木（勘平と妻）敵を討ち損じる

第三段　北山瑞祥寺の血判
　島原近江屋の場―九　父とは知らずに小田文平を殺す、文平（太田武太夫）の懺悔

第四段　道行、由良之介、母千鳥、妻おやな

藤の森の場

山科浪宅、口、妾かよに對面

中、啞の使—早野勘平

切、別　れ

第五段　打　入

即ち第二段の浪宅の場は紀海音の『無佐志鐙』の第三段の翻案で、後の『太平記忠臣講釋』の第八喜内住家の元となり、第三段の揚屋は伏見撞木町の翻案で、『假名手本忠臣藏』の第七・一力の段と、第九・山科の段とに影響を及ぼし、第四山科浪宅は『碁盤太平記』を改修したものである。

〔編者曰〕著者の稿本は、ここで中絶してゐる。まことに殘念この上ない。しかし、別著大東名著選『近松以後』および『近世日本藝能記』等が、この缺を十分補ふものであらう。御參照願ひたい。が一方、本書を通史として一層便あらしめるため、これより後の義太夫劇史の至極あら筋を、簡單につけ添へることにしたい。この場合、もとより編者の私見を加へるところなく、組織は、稿本に挿入されてあつた紙片に記すところに從ひ、内容は、著者の諸別稿から抄出したものを以て根幹とすることにする。

一方、歌舞伎に於ても、その後、義士劇の興行は頗る頻繁であつた。

さて、斯の如く操に歌舞伎に屢〻新作が上演されて、名人の型も出來たあとを受けて、元祿十五年の討入より丁度四十七年に當る寛延元年の八月十四日から竹本座に上演されたのが『假名手本忠臣藏』で、並木千柳と竹田出雲・三好松洛の合作である。大體、淨瑠璃系統の諸作の長を取つて更に新工夫を施したのであるが、また歌舞伎の『大矢數四十七本』に負ふ處多く、殊に七段目の大星は澤村宗十郎の藝をモデルとした事は『古今いろは評林』の藝評の部にも詳述されて居る事である。かういふ次第で、いはば忠臣藏はこれ迄の義士劇の集大成されたものである。それと共に、後の數多くの改作翻案物に對して直接間接影響を及ぼして居る。

この淨瑠璃は大好評で、十一月まで續演したといはれてゐる。忠臣藏が斯く迄世に歡迎された原因としては種々の條件を擧げ得るであらうが、その第一は作柄の勝れて居る事であると思ふ。義士の顚末は大抵の人が知つてゐるので、その中から成るべく劇化して成功しさうな部分を巧に抽き出し、又この忠臣藏より前に興行された諸作を土臺として一般觀衆の有つその豫備知識を利用し、筋の推移は成るべく陰に置いて、一見聯絡の無ささうな異る場面を示して、しかもその間に隱微の有機的關係を保たせて居る。卽ち大序は大時代風の壯麗な鶴が岡の場に始

まり、次に大名生活の一斑を示す松伐諫言から刄傷・切腹といふ物凄い場面に移り、それより一轉して山崎街道の二つ玉から寂れた山崎の農家に於けるおかるの身賣、勘平の切腹といふ悲劇的場面が展開されたかと思ふと、次は忽然と變じて華やかな祇園一力の揚屋の紅燈綠酒の場となり、ここに義士の棟梁大星を繞る色々の人物を配して、その强烈な色彩の間に底光りする大星といふ大人物の片鱗を示し、又々轉じて旅路の嫁入より、義のために夢のやうな青春の可憐なる戀を捨てねばならぬ悲しき場面から、子を思ふ慈父としての本藏の最期となり、更に轉じて天川屋の場から討入迄が十一段に仕組まれて居る。かくして當代社會に於ける各階級各方面の生活相が次から次へと展開されて行く間に、大星を始めとして義士の面々を廣汎なる範圍に亙つて活動させると共に、怒り易い大名氣質の人物や、地位と特權とを利用して放恣貪慾の限りを盡す奸物を配し、その思慮分別に富み只管主家を大切に思ひ、又その血氣の逸るを止めようとして却つて誤解されて非業に終る地味な人物も大切な役目をつとめ、夫のために身を賣る女、忠義の爲に身の卑賤を顧ずに働く健氣な足輕、男と見込まれて然諾を重んじ妻子を犧牲とするも厭はない町人などのやうな種々異る人物を活動せしめて、結局復讐の大目的へと一歩一歩進ませてゐる。かくして有機的にして、しかも各場面毎に特殊の價値を有つ作柄となり、

對照の妙を示し、重疊たる波瀾を描いてゐる。これが忠臣藏の一特徴であつて、やがて實演して一般に歡迎される一原因であらうと考へる。

この淨瑠璃は先にいつたやうに大當りで興業を續けたが、その年の十月になつて、九段目山科閑居の場を受持つて好評を博して居た竹本此太夫と人形遣の吉田文三郎との間に、演出上の意見の相違の爲に衝突を來して、此太夫は島太夫・百合太夫等と共に退座したので、その代りに內匠太夫（豐竹上野少掾）・長門太夫・千賀太夫等を入れて十一月迄興行を繼續した。

なほ、淸元で行はれる『道行旅路の嫁入』俗に「八段目」又は「おかげ參り」と呼ばれる淨瑠璃は、原作の八段目道行へおかげ參りと女商人とをからませたもので、三升屋二三治の添削で天保元年四月十九日から市村座で上演された。又同流の『道行旅路の花聟』は、天保四年三月五日から河原崎座で興行の『裏表忠臣藏』の三段目裏のおかる勘平の道行で、俗に「落人」と呼ばれる。これ亦三升屋二三治の作で、今日も行はれてゐる。その他の豐後節で道行を語られたものも色々あつたが略する。

義士劇を系統的に述べた便宜上、年代としては後になつてゐる忠臣藏を先にとりあげてしまつたが、その他の名作を、もう一、二曲語つておかう。

まづ、延享三年八月二十一日から竹本座に上場した『菅原傳授手習鑑』である。千柳の他に出雲・松洛・小出雲が名を連ねてゐる。此作は近松の『天神記』を藍本として、更に種々の傳説を取入れて趣向を立て技巧を凝してゐる。今兩作中の主要人物についてみるに、白太夫は性格の相違はあるが共通の名である。然るに、その子供であるこの作に於ける松王・梅王・櫻丸は、彼の作の荒藤太・小松・小梅を轉化させたのであらうが、三つ兒としたのには、當時大阪の天滿で三つ兒を生んでお上から五十貫文の鳥目を下さつたのを當込んで「梅は飛び」の歌によつて想を構へて人物を描きわけたものと思はれる。而して、彼の兼竹が是の松王に振替へられ、是の松王に當る彼の荒藤太はこれの宿禰太郎に轉じ替へられて居る。そして松王の女房に千代、梅王に春、櫻丸に八重を配したのなどは頗る凝つた命名法である。武部源藏は傳内流を開いた江戸の書家建部傳内から思ひ付いたのであらうが、不義をした彼等夫婦が丞相の御臺の庇護を受けて深くその恩義を思ふのは『天神記』で兼竹と十六夜との間の不義の兒を御臺が拾ひ上げた恩に感じて丞相の爲に命を捧げるといふ趣向の翻案である。斯の如く兩作を仔細に比較すればその關係は決して淺くない。而も本曲は『天神記』の如く作意を菅公を中心とせずして、その關係者の活動を主としたのは、既に『天神記』がある以上は當然の行き方であるが、

その構想は頗る勝れて居る。殊に作者三人が相談の上で持場を定めて、松洛は二段目の切で菅公と苅屋姫との生き別れ、千柳は三段目の切で白太夫と櫻丸との死別、出雲は四段目の切で松王と小太郎との首の別れと、かう肉身の生別死別を三様に描きわけて、しかも互に趣向が侵し合ふ事がなく、それぞれ特色を發揮して居るのは他に類例を見ない處である。

全篇を場割りにして見れば、大序大内の段から、口賀茂堤の段で齋世親王と苅屋姫との御事が後の波瀾の伏線となり、切の筆道傳授の段が四段目の寺子屋へ照應を保つ。跡は門外。二段目は道行、口汐待の段、切は道明寺で杖折檻、八聲鷄、丞相名殘の各場からなる。三段目は口が車曳、切は佐田村の賀の祝で、茶筅酒、喧嘩、訴訟、櫻丸切腹と展開する。四段目は筑紫配所の場、天拜山飛梅、北嵯峨の隱れ家、寺子屋とかう分れて居り、今日行はれる松王屋敷の段は後の蛇足である。五段目は大内の場で時平一味の最後を中心とする。

本曲に於ては、四段目の切の寺子屋が最も有名であり、また最も勝れて居る事は言ふ迄もない事で、淨瑠璃の時代物を通じて一大系統をなす身代り首實檢の趣向の代表的のもので、近松以來の諸作者によつて幾回となく試みられたこの趣向が、ここに至つてその頂點を示したものといつてよい。それと共に又この場の名セリフや名文句にも、前の諸作に負ふものが少くな

い。例へば「人形かく子はあたまかく、教ゆる人は取分けて世話をかくとぞ見えにける」は、近松の『釋迦如來誕生會』第三段槃特手習の條の「覺えぬくせにあて字書く、教ゆる人は頭かく、世話をかくとぞ見えにける」から來てゐる。また首實檢の場は大體に於て近松の『吉野都女楠』の第三段目口、東寺尊氏本陣の場の小山田前司の首實檢の場の翻案であることは、先に「近松戲曲の內容」の項で述べて置いた(三五三頁—五四頁)。その上、源藏夫婦の「五色の息」は『天神記』の白太夫の「五色の涙」から來たのであるらしく、段切れのいろは送りの名文句は宗助作の『藤原秀鄕俵系圖』(享保十四年)の第四段目の切の「賢女の手本我がいろは、ちりぬるからだをかき抱き、見送る夫の契りはあさき、ゆめみし心地立酒にゑひもせず、京都路に母と妹は立歸る」の改作といつて差支なからう。

この淨瑠璃は非常な好評で翌四年三月迄打續けたが、これは作柄の勝れて居る上に、人形遣の吉田文三郎の考案が與つて力あつた事は『淨瑠璃譜』の記事が之を證して居る。彼が工夫した菅丞相や、松王・梅王・櫻丸の衣裳などは後迄もその樣式が守られた程であつた。江戸の豐竹肥前掾座に於ては翌延享四年二月十八日から興行し、江戸町中の手習師匠方へ切落札を配つて人氣を煽つたので、これ亦大當りで秋まで打通した。なほ、明和六年正月竹本座上場、近松

半二・近松桃南・松田才二・三好松洛合作の『振袖天神記』は、本曲の翻案である。

最後に、數ある判官物戯曲中最も名高い『義經千本櫻』について説明を加へよう。

延享四年十一月十六日から竹本座興行。並木千柳の外に、出雲・松洛が加つてゐる。本曲は前に述べた菅原や忠臣藏と相並んで最も世に知られて居り、又最も受けのよい作である。外題は『義經千本櫻』となつて居るが、内容は壇の浦に於て沒落した平家の後日譚といふ方が當つてゐる。頼朝の使者川越太郎が義經に尋問した三ヶ條の不審の第一として、「平家の首の内新中納言知盛、三位中將維盛、能登守教經この三人の首は贋物云々」と言つてゐる。この言葉は實に全篇の伏線を敷いたものである。されば之に應じて屋島の陣に拔出て高野に登り熊野に詣でた三位中將維盛を吉野下市の鮓屋彌助に、碇を負つて壇の浦に入水した中納言知盛を大物浦の渡海屋銀平に、内侍の局を銀平女房に、横河覺範實は能登守教經にと、かういづれも變名變裝させて世を忍び人目をくらましつつ義經を討取り源氏に復讐しようとする。ここに當代民衆の探求的興味を喚起すると共に、花と散つた平家の末路を悼む同情の念に或種の滿足を與へようとし、併せて血あり涙ある名將義經の面影を浮出させようと企てて居るやうに思はれる。但し作全體を通して見れば、人物の上では義經はワキ役格で、源氏方では忠信とその妻を借りた狐

忠信とが最も重要な役をつとめて居る。發端序詞の「忠なる哉忠、信なるかな信」といふ句も何となくそれを暗示して居るやうにも取れる。

全篇五段の梗概を示せば、第一段大序は「大内の場」で、平家を滅して後白河法皇に復命した義經は、左大臣朝方から勅諚の名の下に、兄頼朝を討てとの謎をかけて初音の鼓を賜る。止むを得ず、一生鼓は打たぬ決心で拜領して退出する。中は「北嵯峨庵室の場」で、世を忍ぶ維盛の御臺若葉の内侍は、夫が高野山にあると聞いて、六代君と共に主馬の小金吾を供に出立する。これは三段目への照應をなして居る。切は「川連上使の場」である。歌舞伎では大抵ここから出す。二段目口「伏見稲荷の段」は、靜が義經から形見として初音の鼓と着背長を賜る場で、四段目の狐忠信の伏線を敷いたものである。中の渡海屋から、切の大物浦船軍の場。三段目口の椎の木から切の鮓屋の段。四段目は「道行初音の旅」から吉野藏王堂の評議の場があつて、中「狐忠信の段」から切の横河覺範實は能登守教經と義經との出會となる。五段目は「吉野山の段」で忠信が義經と名のつて鎌倉方の者と戰つて居る處へ覺範が現れると、忠信は屋島に於ける兄繼信の敵と打つてかかり、雙方互角の働き、殊に忠信には源九郎狐が附添つて居るので通力自在である。ここへ河越太郎が元兇朝方に繩をかけて出ると、平家に取つても敵であ

ると覺範の教經がその首を討ち、覺範は忠信に討たれる。

本曲では、三段目の渡海屋と四段目の切から五段目の吉野山の段とへかけてが眼目であるから、外題にも「大物船矢倉」「吉野花矢倉」と角をつけてある。而して渡海屋から碇知盛の段はいふ迄もなく謠曲の『船辨慶』の翻案であるが、この趣旨を立てる爲にヒントを得たのは『ひらがな盛衰記』三段目の船頭權四郎内から逆艪の趣向ではなからうかと思ふ。

次に狐忠信の原據は何か。これより以前に源九郎狐の傳說があつたといふ事は聞かない。寧ろ源九郎の名は彌助鮓と共にこの作に基いたものらしい。愚見では近松の『天鼓』（元祿十四年）から想を得たものではあるまいかと思ふ。何となれば『天鼓』では伶人富士丸の家に傳はる名高い天鼓は丹州四松の白狐の御臺狐なる千年劫經たる女狐の革で張つたもので、これを守る多くの狐の中に伊賀の上野の古狐彌左衞門狐とその子彌助狐とがあつて、この二つの狐が働くといふ仕組になつて居る。處が本曲の初音の鼓は桓武天皇の御宇に内裏で雨乞の時に打つ目的で大和國に千年劫經たる牝狐牡狐の革で張つたものである。そして子狐がその鼓の音に引かれて忠信の姿を借りて現れて、靜の手にあるこの鼓を守るといふ仕組で、彼此相通ずる想である。のみならず彌左衞門・彌助親子の名は彼にあつては狐の名であつたのが、此に於ては鮓屋親子

の名であるなど、兩作の間に關係を求めても無理ではあるまいと思ふ。それ故初音の鼓は天鼓から生れたもので、彌左衞門彌助親子狐の名は鮓屋の方へ振替へられた代りに、こゝへ葛の葉と狐葛の葉の趣向を翻案して取合せ、忠信と狐忠信とを働かせたものであると考へる。

この淨瑠璃も大當りであつたが、その功勞者の一人たる吉田文三郎の働きについて例の『淨瑠璃譜』は次のやうに言つて居る。

此時吉田文三郎役、渡海屋銀平・鮨屋彌左衞門・佐藤忠信三役なり、源九郎狐の人形廣袖にて、是に源氏車の模樣だんだらの丸紋、人形頭素盞嗚にて、此時はじめて耳の働く仕掛を思ひつきしなり。源九郎ゆゑ源氏車の模樣を付けしにはあらず。此趣向最初より狐と見せざる事故玉もつけられず。色々工夫をなし、右狐場を勤むる政太夫の紋所源氏車ゆゑ、源氏のゆかりにて源氏車の模樣つけし故、今も歌舞伎などには、長上下にて仕れども、どこぞのはずみでは此姿にならねば源九郎狐めかず、是も三代前吉田文三郎仕始めて何國でも此姿でなければ源九郎狐は出來ぬ〳〵。

本曲はその後操芝居に於ても幾度となく繰返して演じられたが、又歌舞伎へも移入されて今日迄も舞臺に生命を有してゐる。

以上、要するに宗輔（千柳）は、豐竹座に或は竹本座に頗る舞臺的效果に富む作品を與へ、

その傑作は今日尙、舞臺上に光を放つてゐるが、近松なき後のまさに第一人者といふべきであらう。

(5) 爲永太郎兵衞

ここで、宗輔に次いで豐竹座の有力な作者であつた爲永太郎兵衞に就て簡單に記して置きたい。

爲永太郎兵衞は大阪の出身で、初め竹田正藏或いは庄藏と稱し、又爲永千蝶とも號した。竹田出雲の門下であつたが後豐竹座に入つた。元文二年十月に竹田小出雲と合作で『太政入道兵庫岬』を處女作して竹本座の勾欄にかけた。これは海音の『新板兵庫の築島』の改作物であつたが佳作ではなく、翌三年正月の興行に文耕堂と三好松洛の二先輩と共に『行平磯馴松』を合作して稍ゝ好評を得てゐる。然るに彼は其後如何なる理由によるのか此の二作のみで竹本座を去り、元文五年の四月には豐竹座の座付作者となつて、然かも單獨で『本田善光日本鑑』を作つて發表してゐる。そして竹本座を去つた爲か、竹田正藏の名を使用せずして爲永太郎兵衞を名告つてゐる。同年九月にはやはり單獨の名を以て『武烈天皇艤』を發表してゐる。この時代

には彼はすでに、並木宗輔と肩を比べて押しも押されもせぬ豊竹座の一枚看板となつてゐるが、宗輔よりは作品に於て劣つてゐることは見逃せない。

寛保元年三月には『本朝斑女筴』を單獨で作つてゐるが、これは近松の『雙生隅田川』を本として更に筋を複雜にし、且つ技巧を弄した作品であつた。同年七月には淺田一鳥と合作で、『播州皿屋敷』を發表した。この作は番町皿屋敷の巷說を材として世界を東山時代に取つた作であつて、上中下三卷の內下卷の鐵山屋敷が最も好評で、現在でもしばしば歌舞伎に演じられてゐるものである。

そしてこの作を名殘として並木宗輔や越前少掾等と共に同年の冬に江戶に來つて肥前座で興行をし、寛保二年の三月には並木宗輔と合作で『石橋山鎧襲』を肥前座の勾欄にかけてゐる。一方大阪の豊竹座では留守組が同月に宗輔・一鳥・太郎兵衛合作の『百合稚高麗軍記』を出してゐる。その八月には江戶より歸阪し十月に『鎌倉大系圖』を一鳥・豊岡珍平と合作してゐる。

越えて寛保三年の三月に『風俗太平記』を合作し、八月には『久米仙人吉野櫻』を單獨で發表した。全篇徒らに技巧に走つて前後の連絡を缺いた作品であるが、大衆受けがして其の後も繰返されてゐる。

延享元年四月には『潤色江戸紫』を一鳥・珍平・但見仙鶴と合作した。これは先年江戸に來演した折に、小石川圓乗寺の八百屋お七の墓に參詣し、それに巷説などを取入れて脚色したのであると、正本の跋に書いてゐる。

この作は紀海音の『八百屋お七』の改作であるが、原作よりは、武家的背景を非常に濃厚にし、吉三郎を以て主家の重寶松竹梅の一軸を探すために苦心する事とし、お七もこれを助け、其の爲に惡人の奸計にかかつて放火の罪に處せられるといふ風に仕組まれてゐる。

彼の作品中では最も佳作であつて、後年までも舞臺生命を保つてゐるものである。

數多のお七を材題とした作品中、出色なものと評價されてよい。

その後彼は『柿本紀僧正旭車』、『遊君衣紋鑑』、『詩近江八景』等を合作し、延享二年の八月に『浦島太郎倭物語』を發表して淨瑠璃に筆を絶つてゐる。勿論豊竹座から去つて二、三の歌舞伎狂言を作つてゐるのであるが、彼の歿年月は不明である。

彼の作品を通觀すると、單獨作には佳作はなく合作に二、三見るのみであり、且つその作品の多くは近松の改作物であり、又先輩の作品の翻案であつた。只一時竹本座に對抗して豊竹座の作者として勢力を張つたことが淨瑠璃史上注目されるのである。